和田精密歯研株式会社
和田弘毅　様

追悼　川原春幸先生

平成28年正月、守口市にあるご自宅に川原春幸先生ご夫妻を表敬訪問した。長男夫婦とともに孫も同行させ、恒例の年始挨拶であった。

川原先生ご夫妻には、長男が結婚するにあたり媒酌人をお願いし、快くお引き受け下さったという恩義がある。もう孫が成人に近づいていることからして20年の歳月を経ている。

長男の結婚は単純でスムースな出来事ではなかった。長男夫婦は息子が上海留学時代に知り合ったのだが、嫁は中国人で、日本語もたどたどしいまま単身での渡日である。当時は理解者が少なく、川原先生だからこそ引き受けてくれた、媒酌人の神様でありました。

第2の話は仕事上の交流の始まりであるが、川原先生とは先生が大阪歯科大学の助教授であられた時代に理工学を通じて知り合った。当時日本国内に不足していたアルミナポーセレンの素材をもとめ、川原先生とアッシュ社の故・原田社長と一緒にイギリスに出張したことがある。英語の良くできる川原先生は、イギリスだけではなく、ドイツのブレメンにあるベゴ社など海外から、コバルトクロム合金とかポーセレンの素材を輸入することに大賛成で、後にコバルトクロム合金の補綴利用の著書も出されたと思う。

その次に第3の協力いただいた話であるが、今から25年前くらいに日本の金パラクラウンは保険補綴が不採算の根源であると思い、香川県の綾上（今は綾川町）にクラウンセンター綾上建設の構想を発表した。国内における歯科臨床の苦境を解決するために、日産１万本の大工場を建設し、合理化をはかるため、漫画「クラウンセンター物語」を発表したところ、多くの同業者が反発し猛反対を受けた。この時川原先生は「絶対に負けるな、和田さんやり切れ！」と激励してくださり、歯科医師会の指導者も応援くださったおかげで20年後の昨年、６億円の建設費が黒字化したのである。川原先生に報告できず、黄泉の彼岸に行かれたことは残念至極であります。

そして趣味のゴルフの話である。川原先生は枚方カントリー倶楽部、宇治カントリークラブ、阪奈カントリークラブがお好きで、私と三村先生とともに年中お誘いくださった。丁寧なゴルフで、しっかりとスイングを素振りして、確実なプレーを進行する。確か80歳を超えてからも「おかしいなぁ、おかしいなぁ」とショットを反省することを忘れず、帰りに「和田さんゴルフは老けない秘訣だ、３Ｇというだろう」と言われたのをいまだに覚えている。ちなみにもう一つのＧは囲碁で、もう一つのＧは好きな異性のことであったと思う。

数えればきりがない。日本口腔インプラント学会の創立から日本歯科産業学会まで、歯科界のリーダーで神様と崇め、教わる存在でありました。

合掌　和田弘毅

和田精密歯研株式会社
和田主実　様

最初に川原先生とお目に掛かったのは私が大学1-2年生の時に、父に新石切の研究所に連れていかれた時です。30数年前ですから名誉教授になられてすぐだと思います。
私が父にどこに行くのか尋ねると「人相見て貰いに行くんや」と言われたので、到着して先生のお顔を拝見した時はまだ「人相見のおっちゃんなんや」と思ってました。

その時から最後まで一貫して先生に言われ続けたことは「父親と同じことをしてはいけない」ということでした。

その後、私はオーストラリアで1年、中国で1年過ごし、1990年、会社に入って間もない27歳の時に、父親が昔行ったのと同様に先生の鞄持ちでイギリスの学会に向かいます。

当時は湾岸戦争前後で空港にも緊張感があり通関も厳しかったと思います。何も怪しいものをもっていないのに川原先生はその風貌で精密検査を受けられます。
　ロンドンの大学に着くといきなり英語で講義を始められます。日本ではありえない、サンドイッチを食べながら講義を聞く学生がいたり、ノートを取らず教室中がタイプライターのキーボードを叩く雨のような音だけがなり続いたり、でも誰一人眠らないで聞いていたりと、初めてのイギリスの講義風景に驚くばかりでした。
　電車でロンドンから欧州審美歯科学会EAED の会場、スコットランドのGleneaglesに向かう途中グラスゴーという駅で乗り換えたのですが、私の判断ミスで反対向きの電車に乗り、途中で気付いて引き返すというミスを起こしました。私は何か言われないかとびくびくしていましたが、先生は一言も文句をおっしゃらずニコニコと電車に乗っておられ、救われました。
　学会場に行くと誰もが先生に挨拶します。パーティーではタキシードとドレスの中、先生は誰よりも背が低いのですが、紋付き袴に扇子で誰よりも目立ちます。ワインが少し回ってくるとアトラクションでスポットライトを浴びているタータンチェックの民族衣装のバグパイププレイヤーのおじさんを押しのけ、舞台の中央で扇子を振りかざし挨拶。席に戻るとサラダを手づかみで食べたり、隣の人のワインを飲んだりと豪快ですが、誰一人嫌な顔をしないで微笑んでおられ、私も全く恥ずかしい気持ちにならず、それまでの業界でのご実力と人徳がなせるその空気に「なんかこの人スゴイ」と思ったのを思い出します。

ロンドンの歯科大学

そしてトドメはフランスの補綴学者と三人でレストランでの二次会に流れた時です。お二人とも相当酔っ払いながらも延々と研究談義が続きます。ふと気が付くと英語だったはずが川原先生は日本語、フランスの先生はフランス語で熱く議論を続けておられるではないですか!

専門用語の単語単語は英語だから何となく通じていたのか、酔って分からなくなったのか今となっては判りませんが、私の初めての海外での学会は川原先生のおかげで物凄い体験になり、この話は私の様々な場所での一生のテッパンネタになっています。

最近では、90歳を過ぎられた頃のある忘年会には「最近日に日に体に衰えが感じられて」という挨拶をされた時には「そんなセリフは皆さん60代でするセリフなのにどうなってんだこの人は？」と思ったものです。一昨年末に家族でご挨拶に伺った時も家内や息子の細かい事を覚えていらして、お話して下さいました。

今も先生は雲の上で扇子をフリフリ、豪快に笑っておられることでしょう。

EAED 1990 Gleneagles, Scotlandでゴルフ

和田精密歯研株式会社
和田主実

臨床器材研究所
涌本 昇　先生

# 川原春幸先生を偲んで

臨床器材研究所
友紘会総合病院
涌本　昇

先生に初めてお会いしたのは、約50年前、私が大阪歯科大学3回生で、先生が歯科理工学講座の助教授として講義を受けた時でした。先生は生物理工学を提唱されており黒板に書かれる字はすべて英語でありました。

私が大学卒業と同時に生化学教室に入室し、講座の多和教授から実験腫瘍(多和肉腫)の細胞培養を研究するようにと言われて、組織培養室の室長である川原教授を紹介されました。そこで先生から組織培養の基礎を学びました。そうこうする内、米国テキサス大学のDr.Roseのところへの留学の話がありました。しかしながら、遠方の事情により断念せざるを得ないことになりました。そこで多和教授から内地留学の許可を得て川原先生に相談したところ、日本組織培養学会の重鎮である東大医科研の勝田教授を紹介して頂き留学の準備を進めていましたが、勝田教授が脳卒中になられたため私の留学は中止となりました。しかし、勝田教授の紹介と川原先生のお口添えで岡山大学癌源研究所の佐藤二郎教授のもとに行くことになりました。そこで腹水肝癌の細胞培養の研究を行い、ここでの研究が私の学位論文になりました。先生は細胞の接着特に金属に対する接着関しては第一人者で日本組織培養学会での顔が広く研究者の知人が多くおられました。

その後、私が口腔外科を学ぶため生化学教室を退職し、そして1980年病院を開設し歯科口腔外科を担当しました。開設した当初から顎・顔面の交通外傷が多く、若い人が瞬時に歯をなくすため、口腔インプラントの必要に追われて、川原先生が創設された臨床器材研究所の所員となり口腔インプラント学を教示していただきました。その結果、先生の指導により専門医、指導医になりました。また、先生の推薦で試験委員、認定委員等の学会委員の委嘱を受けました。

イタリアフィレンツェの国際学会にもご一緒させて頂き、この学会でも先生は座長を務められ国際的にも有名な先生であるという認識を強くしました。

いままで常に先生から叱咤激励をいただき、私の人生の大きな心の糧になりました。

日当たりの良い研究所の二階で机に向かって論文を執筆しておられる先生のお姿が懐かしく思い出されます。

先生が心血を注がれた臨床器材研究所がご子息の川原大先生を中心に益々発展することを祈念します。

臨床器材研究所
添田義博　先生

# 春幸先生

私が、臨床器材研究所に入所させていただいたきっかけは、１９８８年に開催された研究所主催のインプラントセミナーで、現在のインプラント認定講習会の前身にあたるもので、その当時は、インプラント夏季大学とよばれていました。まだ、その当時は、インプラントを行う歯科医師はまだ小数派で多くの先生から、インプラントは不確かな、治療法として考えられていましたが、セミナーの主催者が、歯科大学の恩師の春幸先生であることもあって受講することを決めました。
セミナーが終了して、懇親会で春幸先生から「これから、２０、３０年するとインプラントは、必ず世界中に普及し当たり前の治療になる、先駆けて研究所に入って勉強しなさい」と言われたことが、強く印象に残っています。
　今、先生が予言されたようにインプラント治療は、この２０、３０年で世界中に普及し、長足の発展を遂げました。先生が、もう少し長生きされていれば、この先、インプラントの次にくるものをお聞きできたかもしれないなと思い、少し残念な気持ちですが
先生にお会いでき、教えを受けたことが、自分にとって目に見えない大きな財産になったと感じております。感謝！

添田義博

臨床器材研究所
扇谷義郎　先生

# 川原春幸先生と共に

扇谷義郎

昭和47年春、大学3年生の時、はじめて春幸先生とお会いしました。親父に川原先生の教室へ顔を出すように言われ、それまで大学の教授室へ入室した経験のない私にとって、教授に個別にお会いするという事は、大変な事でした。実際にお会いした時の事は、何ひとつ覚えておりません。そしてこの時は、その後44年間お世話になるとは夢にも思いませんでした。

大学卒業後、歯科理工学教室に研修生として入局し、学位を授かり春幸会の会員として毎年研修会と旅行に参加させて頂いておりました。その旅行は盛大で、日本各地をまわり、観光、そしてゴルフを楽しみました。

先生が大学を退官されて研究所を開設された後、しばらく空白の時期がありました。その後声をかけて頂き、少しずつインプラントへ導いて下さいました。この時最大限に甘えてインプラントの道へ邁進しておれば、もっと違った人生だったような気がします。インプラントを学ぶには、これ以上の環境はないというところに居ながら、と思うと、大いに後悔しております。大阪と金沢という地理的な状況があったとしても、何とかなったんではという気がします。しかし、遊びの方はよく付き合って頂きました。先生も私も上手くはないけれど、ゴルフが好きという共通がありました。枚方カントリーへよくお邪魔しました。この時、歯科界の著名な先生を何人も紹介して下さり、その後の私の大きな財産になりました。

私にとってインプラントにおける最大のイベントは、「お前石川県で近北インプラント学会の大会長をやれ」という春幸先生の無茶振りでした。石川口腔インプラント研究会を立ち上げ、それを核として研究所の全面的なサポートのもとに、大会が成功した時は、やって良かったという気持ちを覚えています。

息子の進学に対しても相談にのって下さり、親身なアドバイスを頂きました。大学卒業後は、現所長の大先生にお願いして川原歯科で面倒をみてもらいました。私の親父は春幸先生と同期で、大変仲が良かったと聞いており、私は44年間お世話になり、息子までお世話になりました。親子三代に渡って川原親子との付き合いになりました。

春幸先生は亡くならない人だと思っておりましたので、今でも「どうしてる」と言ってきそうな気がします。

合掌

臨床器材研究所
林 正人　先生

# 人生最大の恩師

　今から約20年前の1998年春、中村義先生の紹介のもと臨床器材研究所にて日本口腔インプラント学会認定医養成講座100時間コースを受講し、その時初めて先生の存在を知った。その当時は、私の無知が故、業界における偉大さを知る由もなく、臨床家からの学者の講演はつまらないものであり、自画自賛を感じ取るに過ぎなかった。もちろん、100時間コース受講の理由は、認定医取得のためだけであった。1998年の冬、100時間コース終了後、川原，中村先生らとお茶をする機会に臨床器材研究所の所属をすすめられ、認定医（現在の専門医）取得の説明を受けた。必ず取得できるなら入会を決意したが、その返事は確固たるものではなかった。しかし、言動の中で私に認定医や指導医は追うものではない。努力をしていれば自ずと付いてくることを示唆し、その言葉につられ入会を決意した。1998年の秋以降、趣味のゴルフを中断し、治療と勉学に集中し，口腔インプラント学以外にもレーザーやホワイトニングなどありとあらゆる治療法を身につけたく研鑽を重ねた。2000年には、川原先生指導のもと日本口腔インプラント学会誌に掲載され、2003年認定医取得に至った。指導の際，大物に小僧が噛み付かんばかりに食いついていったが、そのしつこさを快く受け入れてくれた。診療中、電話にて患者を待たせながら１時間以上話し込むことは多々あった。話し好きで常に頭を回転させていることが頭脳の若さを維持していた源であったのではないだろうか？また、臨床にほとんど携わった事のない先生が、想像だけで臨床の内容を理解できることがその当時は考えられなかった。2009年、川原先生指導のもと指導医を取得し現在に至る。私の人生を大きく変え多方面で成長させてくれた先生であり、人生最大の恩師といっても過言ではない。ありがとうございました。

2017年1月

林　正人拝

臨床器材研究所
松岡幸生　先生

# 川原春幸先生を偲ぶ

　　僕にとって、春幸先生は、ずっと雲の上の存在の人でした。

「世界の川原」の講義が聴けるのは今だけだぞ！と勤務先の院長に勧められ、１００時間コースを受講させていただいたのも、もう１０年も前のことになります。
当時すでに米寿を迎えられようとしていた春幸先生でしたが、先生の講義は、とてもエネルギーに満ち溢れたもので、卒業して間もない僕は、そのオーラと存在感に圧倒されてしまいました。

　他のビッグネームの先生を従え、そのなかでもカリスマ性を発揮される先生は、当時から僕のなかで神格化されておりましたので、恐れ多くて話しかけることもできず、ただ遠くから見ているだけの存在でした。

　そんな春幸先生と、面と向かってお話をさせていただいたことが一度だけあり、それは講習会を受講した翌年、所員となり参加させていただいていた折の懇親会の席でした。
　「君の名前は、なんと言うんだね？ほぉ松岡君か。担当は何をしているんだね？カメラか。カメラはこれから大事になる。しっかりやってくれ。」といった内容の会話でした。春幸先生ご本人もカメラには非常に詳しく、僕にカメラの文献などのお話もしてくださいました。
春幸先生とお話するのは、非常に緊張しましたし、大変貴重なお時間でしたので、今でもそのときのことを会場の情景とともに、鮮明に覚えております。

卒寿を過ぎてなお勉学を怠らず「終生研究」を掲げられ研究に勤しむ先生の姿は、歯科医としてだけでなく、人間として見習う点が多くありました。先生のように、ご高齢になっても「年だからもうイイ」ではなく、ずっと向上心を失わず何事にでも興味を持ち、邁進していくパワーに満ち溢れた人が健在の社会であれば、この少子高齢社会も怖くない。と感じておりました。

春幸先生はずっと生き続けるものだと思っておりましたので、先生が他界されたときには非常にショックを受けました。そして葬儀の際に、読み上げられた「独り言」に、また感銘を受けました。先生ほどの功績を残された方だからこそ言える、心に残る言葉でした。今回、生前の春幸先生の資料を見返してみたとき、卒寿記念の業績集にその文章を見つけ、思いに耽っておりました。

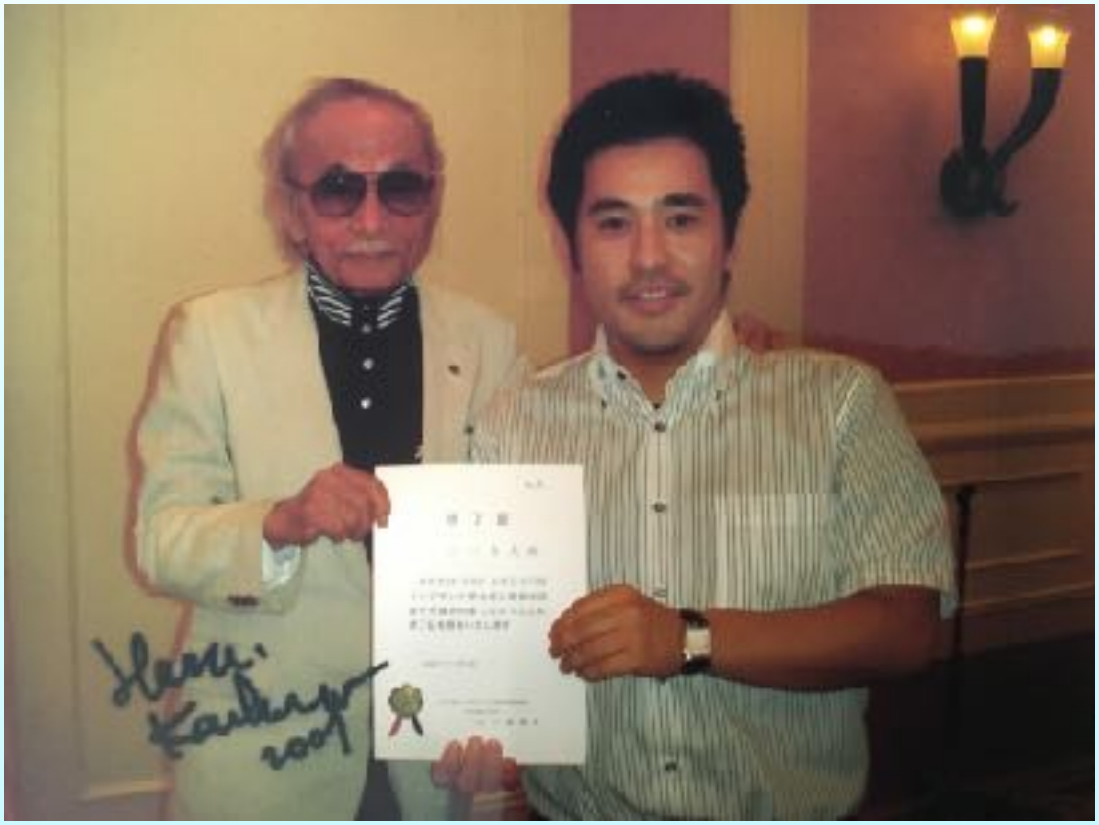
僕にとって春幸先生はリーダーシップがありカリスマ性で人を引っ張っていく魅力がありましたが、現所長の大先生には、春幸先生とはまた違った魅力があります。大先生は末尾の者の意見にも耳を傾け、立場に分け隔てなく接してくださる非常に柔軟で優しいところがあります。今、こうして僕が大先生と親しくさせて頂いているのも、春幸先生あってのものと感謝しております。
自分が年齢を重ねるにつれ、春幸先生が如何に偉大であったかを思い知らされながら、春幸先生を偲ぶ次第であります。

臨床器材研究所　松岡　幸生

臨床器材研究所
西谷寿夫　先生

2007年10月8日　口腔インプラント学会認定医養成講座の修了証を授与して頂いた写真です。
また、臨床器材研究所の月例会の発表では、熱心に聞いて頂き、インプラントに際して多くの御指導を頂きました。川原先生に教えて頂いた事は僕の大きな財産になりました。
川原先生と僕との２ショット写真は、開業してから、カウンセリングルームに飾っております。
写真を見ると、いつも気持ちが引き締まります。
いままでも、これからも、川原春幸先生に見守られてる気持ちでがんばりたいと思います。

西谷寿夫



臨床器材研究所
舩戸 大　先生

貴重な出会い

大阪市開業　舩戸　大

自分が川原先生にお会いしたのは2006年の１００時間コースに参加させていただいたのが初めての出会いです．８０代には思えない，元気な姿，そして頭の明瞭さ，そして，インプラントを含めた，歯科医療への情熱，すべてが衝撃的でした．当時，２０代で卒後間も無く，歯科医師としてやっていけるのか，今後，どのように，自分自身歯科医師として，進んでいけばと不安を抱えて，学ばせていただく中で，講義とともにいつも，元気な口調で『ええか，お前ら，よく聞いとけよ』といいながら，『お金はあとからついてくる，とことん情熱を持って，しっかり，臨床に打ち込みなさい』そんな，ストレートなメッセージは今でも，自分の心の深い部分に刻まれています．

日本のインプラントの発展に，生涯，情熱を持って，過ごされた時間がまだまだ３０代の自分には，想像ができませんが，現在の日本のインプラント学会の発展，そして，学問として，発展する中で，先生の存在が，どれだけ，貢献されたのかは，自分自身，大学時代，現役では講義を聴く機会はありませんでしたが，想像することは難しくありません．

その後，自分自身そんな，川原先生のもとで，学ばせていただきたいと，インプラントの症例を積みながら，臨床器材研究所に入所させていただきました．定例会や，夏期講習会などでも，いろんな学びの機会をいただきながら，一昨年，川原所長，三村施設長，涌本先生はじめ，多くの先生のご指導ももと，念願だった，ケープレ試験にパスし，専修医を取得することができました．自分自身，今後も専門医取得に向けて，日常の臨床に日々研鑽し，先代の川原先生が言われていた，生涯情熱を持って，仕事に打ち込んでまいりたいと思います．

入所以来，１００時間コースでスタッフとして，お手伝いする機会をいただいておりますが，川原所長，三村施設長がいつも，言われる，基礎の大切さ，そして，医療人としての真摯な態度，自分自身，お手伝いしながら，いつも，背筋を伸ばす機会をなっております．自分自身，まだまだ若輩者ではありませうが，今後の臨床器材研究所の発展に少しでもお役に立てればと思っております，今後とも，ご指導のほど，よろしくお願いいたします．

臨床器材研究所
山本大二郎　先生

川原先生の御高名は学生時代から知っていた。
ただ学生であった際には自分の視野が狭く、その業績を知ることはなかった。
卒業してから自分の知識が増えるにつれて、実に偉大な人であったことを知ることになる。
インプラントを初めとして、セラミック治療など今では当たり前のことをいかに研究をし、後進に伝えたことは本当にすごいことだと思う。
そんな偉大な先生に直接の教えを受けることはなかったのは残念である。
そして、今後もその機会を得られないのも残念でなりません。
どうか先生の御霊の安らかならんことを。心よりご冥福をお祈りします。

山本大二郎

臨床器材研究所
金森公朗　先生

春幸　先生の言葉で忘れられない言葉があります。

「侍であれ！！」という言葉です。

春幸先生との出会いは１００時間講習（２００３年度）です。
その講習会で君たちは「侍であれ！」と云われて意表をつかれました。
そこに込められた意味は・・・おそらく・・・歯科医療を探求する者としての‘信念’や‘美学’に基づいた誇りある存在であれ！ということだと私は解釈しています。
それまで様々な講習会に参加してきましたが、歯科医師としての精神性について強く言及されたことは皆無だったのです。
以来、１０数年経ちますが、「侍であれ」ということが身についているかどうかは別として忘れられない言葉となっています。

金森　公朗

臨床器材研究所
足立哲也　先生

ご年配になられても若々しく元気に勉学に励み、
色々スタッフに指導してる姿に感銘を受けました。
僕もこんな風になりたいです。

足立哲也